

老人ホームにおけるセラピューティックレクリエーションサービスの整備に関する一考察 - A 特別養護老人ホームのケース -

茅野宏明（武庫川女子大学）

研究の動機

平成13年度に導入された介護保険制度以前から既に各特別養護老人ホームではレクリエーション活動援助が行われている。遡れば、昭和49（1974）年、（財）日本レクリエーション協会が高齢者レクリエーションワーカーのセミナーを開始した。以後、その効果をもとに本格的に始まった高齢者レクリエーション援助は日本各地に広がり、その後福祉レクリエーションワーカーという専門資格制度まで整った。また、介護福祉士養成にはレクリエーション活動援助の履修が義務づけられている。

このように制度的に整っている福祉レクリエーションをもとにせず、あえてセラピューティックレクリエーション（以下、TR）サービスに視点を置いた理由は：①目的を明確にしたレクリエーション活動援助の提供；②目的に沿ったレクリエーション活動援助の実施；③CTRS¹（あるいは暫定CTRS）の雇用促進、という3点である。

TRサービスの発展を日本において促すには：①CTRSによるTRサービスの展開；②CTRSの資格保持のためのセミナー開催、の2点が重要なポイントになる（茅野、2001）²が、一方ではCTRSの雇用そのものが困難、あるいはCTRS保持者の絶対数の不足という現実もある。この現実的視点、そして近年の雇用状況からすると、日本におけるTRサービスの発展は非常に困難であると予測される。TRの理論的展開だけでなく、実践的研究が求められている状況を真摯に受けとめる時期がやってきたと言える。

そこで、介護福祉士らが自ら企画運営するレクリエーションプログラムをTRの視点で整備する手法を獲得することも、TRの啓蒙には有効であると考えられる。TRサービスの有効性が介護福祉士の間で認められることはTRの発展にとっても重要な課題と言える。

研究の目的

本研究では、既存のレクリエーションプログラムをTRの視点で整備する一方法を提示することを目的とする。具体的には、A養護老人ホーム（茨城県水戸市）で実際に提供されているレクリエーションプログラムを取り上げる。

TRサービスについては、オモロウ(1981)³、鈴木(1995)⁴、ピーターソン&ガン(1996)⁵などがそれぞれ解説している。その他にもTRやそのサービスについての解説が、特に多くの出版社が介護福祉士養成テキスト「レクリエーション活動援助法」または「レクリエーション指導法」という題名のテキストの中で行われている。さまざまな著者がTRサービスについて解説しているが、本研究ではNRPAの課程認定校で頻繁に取り上げられる余暇活用能力モデル（Peterson & Stumbo, 2000）⁶と、近年アメリカで医療・保健分野で支持を受け始めている健康維持／健康増進モデル（Austin, 1997）⁷に焦点を絞り考察する。

研究の方法

A特別養護老人ホームで日常的に行われているレクリエーションプログラム（午後2時からの1時間）を次の手順で整備する手法を施した。

(1)分析方法：

- ① プログラム担当介護職員がレクリエーションプログラムについて次の項目を明記

- ①プログラムのタイトル
- ②プログラムの対象者
- ③プログラムの目的
- ④プログラムの内容

- ② 上記①～④を参考に、TRサービスモデル上で各プログラムの番号を位置づけ
- ③ 全プログラムの分布を、TRサービスモデル上で確認
- ④ プログラムを連続的に提供するための目的と内容を再検討
- ⑤ 再度、全プログラムの分布を、TRサービスモデル上で確認

(2)採択の対象となるTRサービスモデル：

- ① 余暇活用能力モデル
- ② 健康維持／健康増進モデル

(3)分析者：

- ① プログラムを担当する介護職員（介護福祉士）
- ② 研究者

研究の結果と考察

プログラムを担当する介護職員によって7つのレクリエーションプログラムが取り上げられ、それぞれのプログラムが分析された（表1、表中の取消線については後述）。そして、介護職員が施設の設置理念にふさわしいとする健康維持／健康増進モデルに、各プログラムをあてはめた結果が図1である。

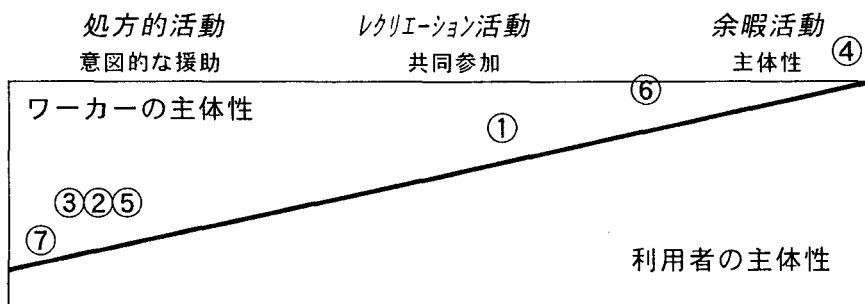


図1 現状分析の結果

表1から、一つのプログラムに目的が複数ある場合が確認できる。目的が複数あることによる弊害は、援助方針の曖昧さに至る。このように大半のプログラムが1つ以上の目的を兼ね備えている場合、TRサービスモデルに既存のレクリエーションプログラムをあてはめることはできない。つまり、図1は正しい現状分析結果とは言えない。

そこで、介護職員にプログラムの内容や実際の場面から目的を1つに絞り込むように依頼した。その結果、不要と判断した目的には取消線を書き加えた（表1）。目的を明確化した現状分析の結果を、健康維持／健康増進モデルにあてはめたものが図2である。要約すると、既存のレクリエーションプログラムは処方的活動が大半を占める。他方、主体性を重んじるレクリエーションプログラムは裁縫のみである。

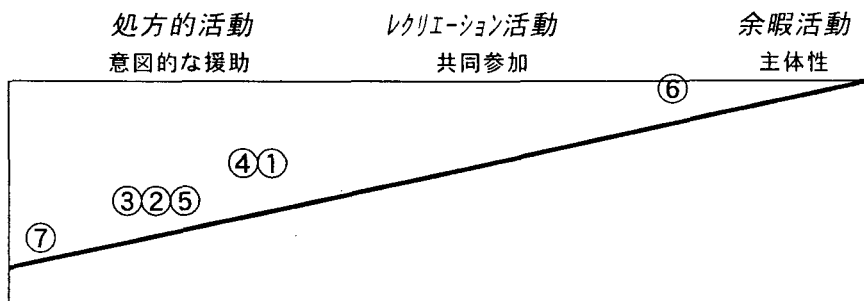


図2 目的の明確化による結果

TRサービスの特徴は、余暇活用能力モデルにしろ、健康維持/健康増進モデルにしろ、利用者の主体性を重んじ、援助者の介入を最小限にするという基本的な考え方は共通である。そして、TRサービスのもう一つの特徴は、援助の連続性（continuum）⁸である。既存のレクリエーション活動援助をTRの視点から整備するには、援助の連続性を確保する必要がある。具体的には、図2上の太線に沿うプログラムを提供することである。そこで、プログラム担当の介護職員に対し、図2を参考にして太線上の空間を埋めるプログラムを企画するように依頼した。その際、次の条件を付加した。

- (1) 予算や人的資源、用具などは現状の範囲内
- (2) 介護職員のプレッシャーにならないこと（新たなレク財発掘よりも既存のレク財の活用重視）
- (3) リストアップされていない既存の各種活動や行事などにも注目

その結果、さらに7つのレクリエーションプログラムが追加された（表2）。追加されたプログラムを目的に従ってTRサービスモデル上に位置づけると次のようになる（図3）

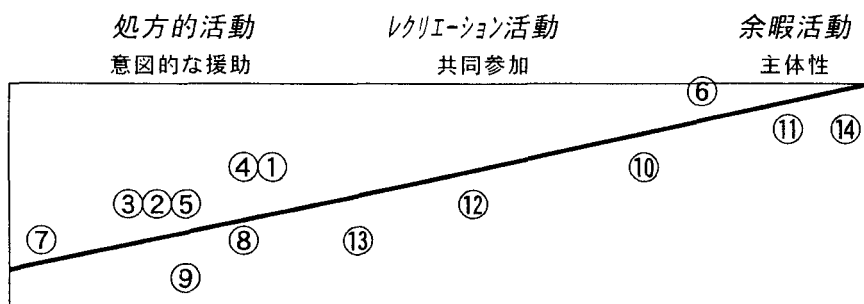


図3 レクリエーションプログラムの連続性

図2と比較すると、共同参加的援助と主体性の援助に該当するレクリエーションプログラムが増えていることがわかる。援助パターンのバリエーションが増えたことが重要ではなく、図3で明確に示されているように、レクリエーションプログラムの連続性が確保できたことの方が重要である。

今後の課題

本研究の手順により、既存のレクリエーションプログラムをTRの視点で整備できる可能性が見いだせた。今後は実用性についての検証が必要である。特に、①介護職員への周知徹底、②プログラムの変更、③利用者の感想、④利用者の行動変容、⑤職員の感想、⑥経費の効率性などの観点に注目する必要がある。

表1 レクリエーションプログラムの現状分析結果

タイトル	① シーツパレ
対象者	軽度～中度の障害性老人、どちらかの上肢が使える方
目的	●上肢の上下運動、●ボール内での体操を体験する。 2チーム作る、それぞれがシートの端を持つ、シートにボールを乗せて、上肢を上下に動かす、ボールを高く上げる。時間内でボールが高く上がった数をみ んなで数え、他のグループと競争する。
内容	
タイトル	② 紙沼
対象者	軽度の障害性老人、上肢が使える方、片麻痺でも、誰か介助があれば折り紙が折れる方、中度～重度の障害の方は試合からでも参加できる。
目的	●折り紙を作る楽しさや ●自分で作った作品を贈りあう楽しさを体験する。 ●細かい作業をすることによって指先の運動をする。
内容	折り紙でお相撲さんを作る。それぞれが作ったお相撲さん本人が名前を付け、トーナメント方式で試合をする。
タイトル	③ 漢字クイズ
対象者	軽度の障害性老人
目的	●忘れかけていた漢字を思い出してもらい、頭の体操。 ●例えば、魚へんの漢字を出題し、問題をあててもらい。
内容	
タイトル	④ コーラス
対象者	軽度～中度の障害性老人
目的	●歌声により呼吸器機能の維持、●楽譜や楽しさを体験する。 ●指揮者や拍手とりの方を演出する、季節の歌を演出して歌う。
内容	
タイトル	⑤ ボールゲーム
対象者	判断があっても、上肢が少しでも動かせる方
目的	●ボールを振り回す、ボールを振り回す楽しさを体験する。 ●ボールを投げて、ボールのピンを倒す、身体レベルにあわせて、ボールを投げる距離を定める。また、ボールが投げられない方に対しては、ボールがピンまで届く様な補助器具を使って投げしてもらい。
内容	
タイトル	⑥ 絵紙
対象者	痴呆状態も比較的広く、継続する動作が可能な方
目的	●細かいものを縫うことにより指先を動かす、●中着などの作品を作る楽しさを体験する。
内容	予め、布や縫製道具を準備しておく。巾着や巾着など本人が日常で利用できるものを作る。ある程度、作り方については助言するが、できるだけ見守りをする。
タイトル	⑦ 誕生会
対象者	構成できる方
目的	●1：誕生日の方は、主役になる楽しさを体験してもらう。●2：それ以外の方は、他の利用者への興味や理解をもってもらい、●それぞれが場の雰囲気を楽しんでもらう。 その月の誕生者は前に並んでもらい、一人ずつ自己紹介をしてもらう。その後、誕生日の歌をそれぞれの名前を入れて歌う、プレゼントを利用者から誕生者に渡してもらい、一人ずつ感想をいただく。

表2 追加されたレクリエーションプログラム

タイトル	⑧ 回想法
対象者	痴呆ではない方、軽度～重度の障害性老人
目的	懐かしさ、幸福感、楽しさなど情緒的側面での安寧を提供する。 少人数でリラクゼーションできるスペースを利用する。テーマはその季節の行事に 沿って行う。最近の風景の写真や民謡を使い、昔のことを思い出したり、今のもの のとは感じたりして、話してもらい。
内容	
タイトル	⑨ お化粧タイム
対象者	全利用者
目的	最近なくなってきたお化粧や髪型を通じて、忘れていた感覚を体験する。
内容	お化粧の仕方や身だしなみを再度学び、実際にやってみる。
タイトル	⑩ ショッピング
対象者	自己選択・決定ができる利用者
目的	自己選択・決定の機会を提供する。 外出可能な方はお店に出かけ、外出できない方でも通販などにより、実際に ショッピングする。ウィンドショッピングでもよい。
内容	
タイトル	⑪ フラッシュジョー
対象者	全利用者(自由参加)
目的	自由により参加する。 希望者は自分の持っている洋服を持ち寄り、おしやれをし、発表しあう。
内容	
タイトル	⑫ コーラス
対象者	軽度～中度の障害性老人
目的	それぞれが役割を果たすことを通じて、一体感を体験する。
内容	歌う曲だけでなく、指揮者や拍手取りの方を演出する。援助者も固まりながら、お互いに意見を出し合い、季節の歌を演出して歌う。
タイトル	⑬ 書道
対象者	筆を握る能力のある方、補助具等で筆を握れる方
目的	思考力や決断力を維持、向上する。
内容	月の初めの日にまでに自分の月間目標を決定し、月初めに書く。
タイトル	⑭ 書道発表会
対象者	全利用者(自由参加)
目的	書道発表会へ自主的に参加する機会を提供する。
内容	それぞれの好きな書を書いて、掲示により発表する。可能な範囲で自分の書に ついてのショートスピーチの機会も提供する。

¹ Certified Therapeutic Recreation Specialist の略。簿記高検。TR 師一の資格。

² 茅野宏明、(2001)。セラピューティックレクリエーションサービスモデルの実践に関する研究(1)、レジャー・レクリエーション研究、46、17-20。

³ オモロウ、G。(今井毅訳、(1981)。セラピューティックレクリエーション入門、不味峠出版。

⁴ 鈴木秀雄、(1995)。セラピューティックレクリエーション、不味峠出版。

⁵ ピーターソン、C.他、谷紀子他訳、障害者・高齢者のレクリエーション活動、学苑社。

⁶ Peterson, C.A. & Stumbo, N. (2000), Therapeutic recreation program design (3rd. ed.). Boston, MA: Allyn and Bacon.

⁷ Austin, D. (1997). Therapeutic Recreation (3rd ed.). Champaign, IL: Sagamore, p.146.

⁸ 前掲 7)、p.144.